

一

問一

犯罪者個人を非難するよりも一般的な犯罪予防を重視すると、非難にともなう見せしめ効果が働かず、社会の他の人間たちが犯罪を事前に自制することが困難になるという議論。(八十字)

問二

自らの犯罪を仕方のないものとする態度と、犯罪者を他の行動を取れなかった者と見なすべきだという提言は、行為の代替可能性を捨象している点では違いがないということ。(七十九字)

問三

遺伝と環境に基づく脳活動との相関で行為を捉える科学的見地からすれば、犯罪者個人を有責だとして処罰するのは、公正さや客観性を欠くものとなる危険があるということ。(七十九字)

問四

過去の行為の責任を行為者個人に帰することを前提として、現在に至るまで歴史的に形成されてきた倫理は、行為を遺伝と環境の関数として決定論的にとらえる近年の科学からすると非合理的な認識とされるかもしれないが、そうした倫理から、人々の主体的な選択として集団的に共有しうる持続可能な未来を実践的に構想していくことも可能だということ。(百六十字)

問五

- (a) 頻繁
- (b) 放免
- (c) 疾患
- (d) 破棄
- (e) 包摂

問二

問一

- ① 御前に控えている人を下がらせてくださいませ
- ② 親である私より先にはまさか飲みなさるはずもないのだから
- ③ お亡くなりになったらその時
- ④ 衣をひきかぶって臥せりなさる

問四

- a ける
- b ける
- c けれ

問五

二

問二

父清盛が春日大明神に首を取られた夢を見て、繁栄する平家の命運が父の悪行で尽きたと悟り、絶望したから。(五十文字)

問三

- (1) 無文の太刀
- (2) 清盛の葬儀で自分が使うつもりだったが、清盛より先に自分が死にそうなので、自分の葬儀で維盛に使ってもらおうという意図。(五十八文字)

三

問一

- (ア) 馬の毛は細いので、描くことができない。
(イ) 当然鼠の毛は描かなければならない。

問二

大きな馬を画面に合わせて小さく描くこと。
(二十字)

問三

牛や虎の大きさを描くのであれば毛を描かなければ
ならないのに、優れた画家が小さい馬の絵に毛を
描かないのをまねて、馬には毛を描かないこと。
(六十七字)

問四

- ① ただ
② すべからくべつあるべし。
③ のみ
④ もし